

平成 23 年 度 自 己 評 価 表（分掌）

鳥取県立鳥取養護学校

中長期目標 (学校ビジョン)	安心、支え合い、学び合いのあふれる学校 ～児童生徒一人一人が自らの力を発揮しながら安心して学び、関係機関とつながり 合って幸せに生きるための舞台づくりをする学校～			今年度の 重点目標	1. 安心して学べるための環境づくりに努める。
					2. 支え合い、つながりあう体制づくりに努める。
					3. 豊かな生き方をめざしたキャリア教育を推進する。
					4. 自己の授業を見直し、授業改善を行う。
年 度 当 初					
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	評価結果 ()月 評価基準
1. 安心して学べるための環境づくり	(保健部) 緊急時を念頭に置いて訓練に取り組み、素早く、正確な対処ができる。	毎年度訓練を行っているが、教職員が素早く、正確な対処ができるための知識と技能に差がある。	学校の教職員集団が、緊急時を想定して素早く、正確に対処ができる集団になっている。	訓練で出た課題をどう解決すべきかを討議する時間を設け、緊急時対応の正確さを高める。	S:救急訓練で知識や技能が身につき、他の教員へ指導ができる。 A: 救急訓練での反省を討議する時間を設け、知識と技能が身についた。 B: 救急訓練での反省を討議する時間を設け、知識と技能が高まった。 C: 救急訓練での反省を討議する時間を設けたが、知識と技能に自信がない。
	学校看護師や医療機関の指導と協力を得て、安心安全な学習の環境を整える。	学校看護師や医療機関からの情報を活かし、予見して事前に環境を整える必要がある。	関係者との連携のもとに、環境改善している。	学校看護師や医療機関の指導やヒヤリハット事象から学習環境の改善を提案する。	S:学校看護師や医療機関と密に情報交換して、予見して事前に環境を改善した。 A: ヒヤリハット事象から学習環境を見直し、改善した。 B: ヒヤリハット事象から学習環境を見直した。 C: ヒヤリハット事象を活かした学習環境の改善ができなかった。
2. 支え合い、つながりあう体制づくり	(総務部) 保護者と教職員の会の充実を図り、保護者と協働で学校教育を進めるための基盤をつくる。	保護者と担任とのつながりは強いが、保護者同士のつながりや学校と協働していく体制づくりは十分とはいえない。	保護者同士の関係が広がり、学校教育活動に協力している。	学校行事やP T A活動や参観日等に出席しやすい体制を作り、参加者を増やす。☆	S: 学校行事やP T A活動や参観日等の参加者数の平均が60%以上。 A: 学校行事やP T A活動や参観日等の参加者数の平均が50%以上。 B: 学校行事やP T A活動や参観日等の参加者数の平均が40%以上。 C: 学校行事やP T A活動や参観日等の参加者数の平均が30%以下。
	情報発信の仕方を工夫し、鳥養の教育に関心を持つ人を増やす。	学校行事や公開週間で本校を訪れる関係者が固定化し、本校の教育を知る人が限られている。	本校の教育について知る人が増え、公開週間等で学校を訪れる人が増えている。	学校活動の案内を、ボランティアサークル、公民館、民生委員等学校関係者以外にも拡大したり、報道機関を利用したりして、情報を広める。☆	S: 学校公開週間1回あたりの平均来校者数が50名以上で、来校者の幅が広がった。 A: 学校公開週間1回あたりの平均来校者数が40名以上。 B: 学校公開週間1回あたりの平均来校者数が30名以上。 C: 学校公開週間1回あたりの平均来校者数が30名以下。
	(自立活動部) 同じ障害種の特別支援学校や療育園との連携を深め、本校の病弱・肢体不自由教育の専門性を高める。	他校との連携が進んできているが、それらの情報を活かして、専門性を高めるまでには至っていない。	自立活動に関する通信や他校との連携で得た情報を、実践に活かす教職員が増える。	他校や療育園から得た役立つ情報を職員に積極的に伝え、専門性の向上に活かす。	S:役立つ情報を積極的に活用して専門性の向上に活かすとともに、他の教職員に指導・助言をすることができた。 A: 役立つ情報を受け、積極的に専門性の向上に活かした。 B: 役立つ情報を受け、専門性の向上に活かした。 C: 役立つ情報を受けたが、活かしきれなかった。
	(地域・教育支援部) 学校の支援を関係する施設・機関につなぎ、児童生徒の社会生活が豊かなものになるように努める。	豊かな社会生活のために、児童生徒が関わる施設・機関に支援方法を伝え、共有していく必要を感じる。	保護者・学校・関係機関の支援がつながり、豊かに生活している。	個別の支援会議等、保護者や関係機関と連携する機会を設けるよう働きかける。	S: 個別の支援会議を開催し、さまざまな機関とつながった。 A: 自ら連携する機会を設けるように働きかけ、保護者・関係機関・学校がつながった。 B: 自ら連携する機会を設けるように働きかけ、関係機関とはつながったが、保護者となげることができなかった。 C: 自ら連携する機会を設けるように働きかけたが、保護者も学校も関係機関とつながることができなかった。
3. 豊かな生き方をめざしたキャリア教育の推進	(全体) 児童生徒の卒業後の豊かな生活や可能性の伸長をめざしたビジョンの実現を保護者と一緒に進めていく。	担任と保護者が卒業後の豊かな生活をめざしながら、同じ目的意識をもって語ったり、行動したりするまでに至っていない。	担任と保護者が卒業後の生活を豊かなものにするために、今何をすべきかを一緒に考え、同じ目的意識をもって行動する。	担任と意識や課題の共有を図るために、①施設見学、②施設利用体験や職場体験、③子どもの明日を考える会、に多くの保護者が参加するように働きかける。	S: 学校の設定した行事にきてもらい、保護者も同じ意識を持って話すことができた。 A: 1つ以上参加してもらい、話ができた。 B: 来てもらえなかったが、話はできた。 C: 来てもらえず、話もできなかった。
	(地域・教育支援部) キャリア教育研修会などを通してキャリア教育の考え方(捉え方)を理解し、実践に生かす。	 学部や個人によって、キャリア教育に対する捉え方や実践に違いがある。	 生き方教育としてキャリア教育を捉え、意識して実践に取り組む。	 教職員が学校教育全体を通してキャリア教育を考えることができるように、評価シートを作成し活用する。	S:キャリア教育の捉え方を意識して実践し、全体計画・評価シート等の改善点を提案した。 A: 全体計画をもとに将来像を見通しながら評価シートを作成し、意識して実践した。 B: 評価シートを作成することで、キャリア教育の捉え方が理解できた。 C: キャリア教育の捉え方を十分に理解できなかった。
4. 自己の授業を見直しての授業改善	(研究部) わかる喜び・できる喜びのある授業をめざして、授業の改善と充実に努める。	授業改善のポイントが職員に十分伝わっていないので、改善までに至っていない。	明確になった改善ポイントを活用して、日々の授業改善を行っている	各学部ごとに明確になった授業の改善策を活用して、日々授業改善をしている。	S: 改善策を活用して、子どもの変化を感じた。 A: 積極的に改善策を活用した。 B: 改善策を大体活用した。 C: 改善策を活用しきれなかった。
	(文化情報教育部) 情報機器、視聴覚機器の効果的な活用を推進し、わかる授業や魅力ある授業を実践する。	情報機器や視聴覚機器の効果的な活用に差がある。	学習のねらいに合わせて効果的に情報・視聴覚機器を活用した学習を実施している。	情報機器活用研修会や機器に関する日常的な情報伝達を行い、授業での効果的な活用についてのアドバイスや実践紹介を行う。	S: 必要な時は必ず活用し、他の教員にもアドバイスをした。 A: 必要と思う時は、情報機器を活用して授業を行った。 B: 必要と思う時は、時々情報機器を活用して授業を行った。 C: 授業の中で情報機器をほとんど活用しなかった。

赤字は本校教職員として身につけたい標準レベル